



Title	手足の外表性奇形523例の分析
Author(s)	政田, 和洋
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35506
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	政	田	和	洋
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	7426	号	
学位授与の日付	昭和	61	年	8月5日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
学位論文題目	手足の外表性奇形523例の分析			
論文審査委員	(主査) 教 授	小野 啓郎		
	(副査) 教 授	藪内 百治	教 授	橋本 一成

論文内容の要旨

〔目的〕

手足の奇形は全奇形の約3分の1程度を占めており整形外科領域においては重要なテーマのひとつであるが手足の奇形を比較検討した報告はない。また、ある種の奇形には地域性や人種差があることも報告されているが本邦におけるまとまった報告はみられない。

本研究の目的は当科における手足の奇形を分析し本邦における奇形の特徴を明らかにすることとその臨床的な特徴から各奇形の病態を知ることである。

〔対象ならびに方法〕

過去11年間に経験した523例の手足の奇形を対象とした。各奇形につきその分類と発生頻度、性別、罹患側、家族歴、合併奇形を検討することにより本邦における特徴を明らかにした。

また、手足奇形合併例については各症例につき手足の奇形の表現型、罹患側および罹患指列を検討した。

各奇形の分類は1983年にSwansonらが提唱した分類に従い7型に分類した。

〔結果〕

523例のうちわけは、手奇形のみをもつものが281例、足奇形のみをもつものが149例、手足に奇形を合併するものが93例であった。

発生頻度

各奇形別の発生頻度は手足共に同様の傾向を示した。すなわち、最も多いものは多指症であり先天性絞扼輪症候群と中央列形成不全がこれに次ぐ。逆に、巨指症や短指症などは手足共に少なかった。

性差

中央列形成不全は男子に多くみられ第4中手骨短縮症は女子に多かった。これらの傾向は手足共に同様であった。

家族歴

家族歴を示したものは少なく2.7%に認められたにすぎなかった。各奇形と家族歴の間には特別な相関はみられなかった。

罹患側

両側罹患が多いものとしては第4中手骨短縮症があげられ巨指症は片側罹患が多かった。

罹患指列

多指症の発生部位は、手においては、母指の多指症がほとんどを占めるのに対して、足においては逆に、小指の多指症がほとんどを占めていた。また、手における小指の多指症と足における母趾の多指症は、それぞれ、両側罹患であることが多く、他の奇形を合併し易い。

手足以外の合併奇形

5%に手足以外の奇形の合併を認めたが、絞扼輪症候群において内反足を合併し易いということ以外には特徴的なものはなかった。

手足合併奇形

手足奇形合併例93例のうち84例は、手足共に同じ奇形を合併しており異なる分類に属する奇形を合併したものは9例にすぎなかった。また、同じ奇形を合併した84例については、その発生指列はほとんどにおいて同じであった。たとえば、中央列形成不全は長軸型発育停止に属するが30例中13例は手足の病変を合併しており同じ分類に属する他の奇形すなわち橈側列形成不全や尺側列形成不全などの合併はみられなかった。

また多指症についても同様であり多指症における手足奇形合併症は手足共に多指症を合併しており14例にみられた。

また14例中10例は手足共に多指症が同一指列に発生していた。

〔総括〕

- ① 多指症は手においては母指側に多く足においては小指側に多い。諸外国の報告によると多指症の発生部位は手の小指側に多いとの報告があり、これは本邦における際だった特徴である。
- ② 手足奇形合併例においては同一の奇形が同一指列に発生することが多い。このことより、手足奇形合併例においては奇形の原因が外的要因ではなく、各指列に特有の内的要因が存在し、それにより奇形発生が制御されていることが強く示唆された。

論文の審査結果の要旨

〔目的〕 本邦における手足の外性奇形の特徴をあきらかにすると共に、特に手足の奇形合併例

を検討することによりその病態を知る。

〔方 法〕 過去11年間に当科を受診した手足の外表性奇形523例につき性別、罹患別のはか特に合併奇形の種類と罹患指列を検討した。

〔結 果〕 手奇形のみをもつものが281例、足奇形のみをもつものが149例、手足に奇形を合併するものが93例であった。手の多指症は軸前型が多く、足においては全く逆であったがこれは、諸外国の報告とは異なっていた。93例の手足奇形合併例中84例は手足共に同じ種類の奇形が合併していた。また、その罹患指列は手足共に一致していた。このことは、手足の発生における時間的なずれを考えると、その原因として外因性の要因ではなく、内因性の要因の存在を強く示唆する。